

## 2025年12月21日降臨節第4主日

イザヤ書7章10-17節  
ローマの信徒への手紙1章1-7節  
マタイによる福音書1章18-25節

本日は、降臨節第4主日です。プロテstant教会の多くは、本主日をクリスマス礼拝として祝っていると思います。聖公会においても、降誕日25日よりも第4主日を中心に祝う教会もありますが、わたしたちの教会は、25日がクリスマスの祝いの中心です。

本日の福音書は、この時期に必ず読まれるともいえる箇所です。しかし、「イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、一緒にになる前に、聖霊によって身ごもっていることが分かった」は、新約の部分から『聖書』を初めて読み進んできた人にとって、カタカナの聞きなれない名前ばかりの長い系図を読み終えて、やっと本文に入ったかと思いつつも、内容的に非常に戸惑う部分と言えるかもしれません。クリスマスという言葉自体は、かなり有名になりつつありますが、詳細については、まだよく知られているわけではありません。マルコ福音書を専門にしておりますので、その冒頭である「神の子イエス・キリストの福音の初め」(マルコ1:1)が、新約部分の最初にあれば、どれほど読者が入りやすいかと思ってします。しかし、もう何十回もこの箇所を、この時期に読んでいるわたしたちですが、毎年心新たにして学ぶことが大切です。また、いつでも新しい発見もあります。今年も、心新たにイエス様の誕生のお話から学びたいと思います。

18節の説明を受けて、「夫ヨセフは正しい人だったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」(マタイ1:19)とマリアに起こった出来事に対する、夫ヨセフの対応が語られます。このヨセフの決断について、心の動きなどの詳細は語られません。受胎されたマリア様のお気持ちなどにも全く触れられていません。しかし、ヨセフの決断は、律法を守りながらも、マリアとその胎内の子に及ぶ被害を、最小限にしようとした結果であろうと推測できます。婚姻関係がなくなれば、結婚前の受胎という出来事であっても、律法違反にならないからです。

このようなヨセフの決断について、ヨセフの正しさとは何か、そのことへの問い合わせから、律法批判へと論を進めることは、飛躍のし過ぎです。夫ヨセフは、主なる神様が定めた律法を、無視することも軽んじることなく、その解釈可能な範囲の中で、婚約者のマリア様とその胎内の子を守ることを考え、人間の理性的判断として、もっとも良心的な選択は何かを示したからです。

そのような理性的な判断を下したヨセフに対して、夢で天使が、「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」(マタイ1:20-21)と告げます。

そして、「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎える」のでした（マタイ 1：24）。

ヨセフの決断は、律法に基づいた理性的・合理的な決断を超えていました。そして決断の根拠は、「夢」でした。『聖書』における夢は、特別な意味を持ちます。それは神的事柄について、人間に指示を与える機会であるからです。その意味では、ヨセフは理性を超えて、主なる神様を信頼して、その指示に従ったということになるのですが、単に命令通りに動いたということではありません。律法を守ることを前提とした「判断」から、それを超えた、マリアとその胎内の子を守るための、ほんとうの「優しさ」とは何かを見出したということです。たとえ、命が助かったとしても、一人で子を産み育てるマリアの未来は、現代でもそのような状況は大変ですから、イエス様の時代、さぞ大変であろうことは容易に推測できるからです。

ヨセフが夢を通して決断を下す姿は、詳細の描写なく、淡々と描かれます。それは、大きな決断といえるかもしれません、全く新しい壮大な何かを始めるというものではなく、予定通りに結婚生活を始めるという小さな決断でもあったからです。そして、主なる神様を信頼する時、誰でも示すことのできる優しさでもありました。福音書の語り手は、ヨセフのそのような決心について、「主が預言者を通して言っていたことが実現するためであった」（マタイ 1：22）と説明します。そして、その根拠として、「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」が語られます。この言葉は、本日の旧約日課、「イザヤ書」7章14節からの引用です。ヨセフの決断は、500年以上前の『聖書』に示されていた事柄であったのです。

本日の福音書は、イエス様の誕生で終わります。しかし、この時期は、本来顕現日の出来事である、三人の博士の訪問も含めて、クリスマスの物語として学ぶことが多いと思います。マタイ福音書の描く、イエス様の誕生の後のお話は、喜びだけではなく、聖家族のエジプトへ避難、ヘロデ王によるベツレヘム一帯の二歳以下の男児たちへ悲劇、そして、聖家族のナザレへの転居と続きます。生まれたばかりのイエス様を伴って旅をする聖家族の姿は、どれだけ彼らが周囲の人々に助けられながら歩んだかを暗示します。ヘロデ王の姿は、人間の理性的判断が、その用い方と歩むべき方向を間違えると、いかに大きな悲しみを派生させるかを明示しているのです。

マタイ福音書の描くイエス様の誕生、クリスマスの出来事は、ヨセフの決断、そこから示される優しさによって始まり、また様々な小さな優しさが聖家族の歩みを支えていたことを示します。そのような優しさの大切さは、世界に悲しい出来事がある限り、常に変わらないのです。そして、そのような小さい優しさがいかに無力に思えても、その優しさから誕生された御子イエス・キリストが示す、十字架と復活の希望は、そこから本当の平和が生まれることを示します。だから、クリスマスは喜びに他ならないのです。今年も、教会に集められたわたしたち自身が、その喜びを心に刻みたいと思います。そして、その喜びを誰かに示す歩みをこれからも続けたいと思います。